

## 7 近代水道の完成

近代水道の第一歩である創設水道の建設は、盛大な起工式も済ませて順調に進むかにもえました。しかし、鉄管の納入をめぐる思わぬ事態に直面します。

東京市はすでに国産品の鉄管を使用することとじていましたが、契約した製造業者の体制が十分に整わず、鉄管の納入が大幅に遅れるという事態になりました。やむをえず明治 27 (1894) 年 2 月に外国製品も購入することを市会で決議し、ベルギーやオランダの鉄管を購入することとなりました。

鉄管問題はさらに悪化し、国産品製造業者が東京市の検査で不合格となった鉄管を合格品と偽って納入するという不正事件を引き起こすに至ります。明治 28 (1895) 年 10 月、この事態が明るみに出て刑事事件となり、府知事の辞職、市会の解散などの政治問題へと発展しました。このため、すでに布設した鉄管を掘り起こして再検査を行うという面倒なこととなり、工事の進ちょくに影響を与えました。

また、明治 27 (1894) 年 8 月には日清戦争が勃発したため、資材や労働力の不足、諸物価の高騰等に苦慮し、工事の進行は予定どおりには進みませんでした。

しかし、幾多の障害を克服して、新水路の築造、淀橋浄水工場、本郷・芝給水工場の建設、鉄管布設工事は進められ、明治 31 年 (1898) 秋ごろまでには創設水道の主要施設がほぼ完成しました。

こうして、明治 31 (1898) 年 12 月 1 日、淀橋浄水工場から本郷給水工場を経て神田、日本橋方面に初めて近代水道が通水されることとなったのです。

給水範囲は、その後、鉄管の敷設にあわせて順次拡大され、明治 32 (1899) 年末までにほぼ当時の市内全域に及び、この年の 12 月 17 日、淀橋浄水工場で創設水道の落成式が盛大に挙行されました。

近代水道の通水に伴って、江戸・東京の人々に親しまれてきた神田・玉川両上水はそ

の役割を終え、明治 34（1901）年 6 月に市内への給水を停止しました。

近代水道創設に当たって計画した施設の給水能力は日量 17 万立方メートルでしたが、建設の途中で増強され、完成時には日量 24 万立方メートルに達しました。

創設水道の施設がすべて完成するのは明治 44（1911）年のことですが、このときには早くも拡張計画の準備が進められていました。